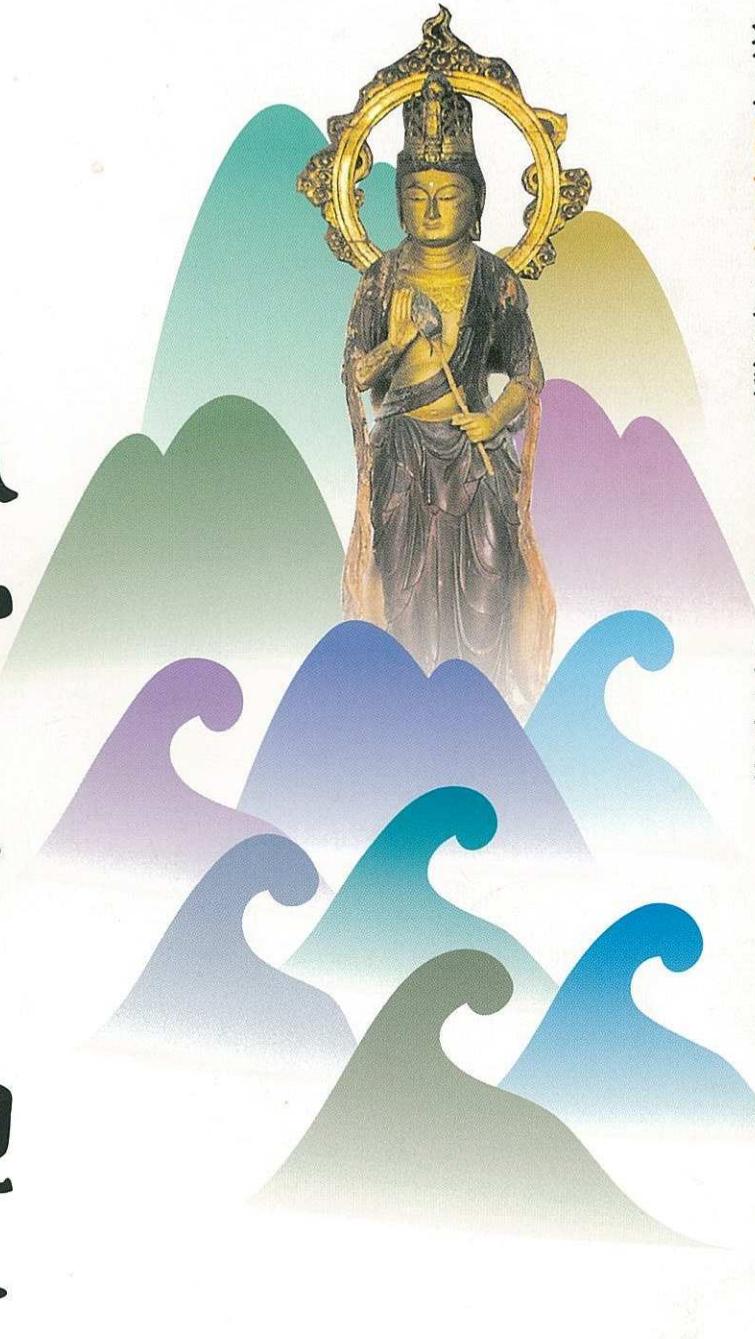


氣仙三十三觀音

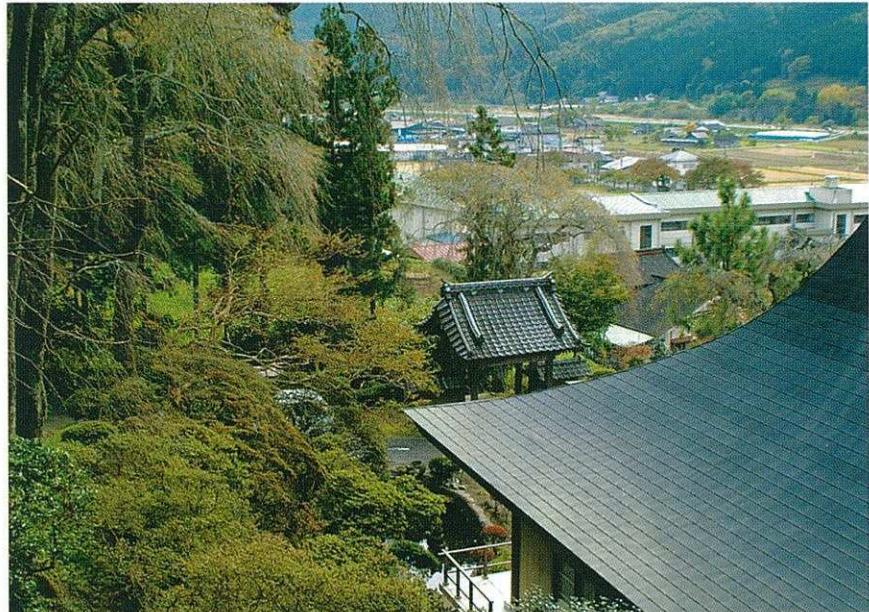


郷土けせんを記録にとどめる[中興集 Part 1]

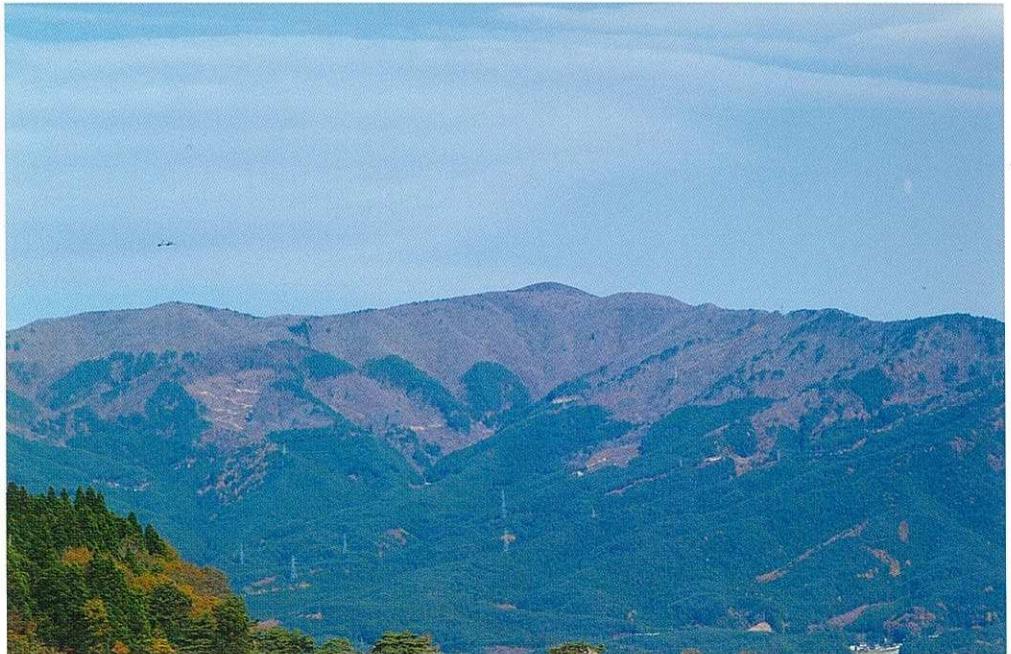
氣仙三十三觀音

案内者：山田原三／撮影・解説文：こんの・のりお／発行 共和印刷企画センター ￥1,000

気仙三十三観音



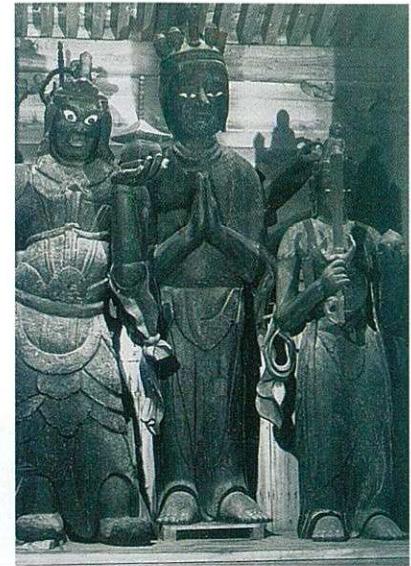
常光寺観音堂より横田の里を望む



気仙の総鎮守であった神仏混交の靈峰氷上山

●観賞する写真集ではございません。郷里のたどった目にはみえない糸がテーマです。

案内者：山田原三／撮影・解説文：こんの・のりお 共和印刷企画センター 2004-11



気仙三觀音の内、観音寺観音堂の十一面観音像と脇仏（秘仏）

という説もありますから、鎌倉時代初期のことになります。当時は、参拝者の多くが武士で、庶民が巡るようになったのは江戸時代になってからといわれます。

東北にも歴たるものがあります。「奥羽三十三観音」。第一番は宮城県名取郡高館村で、名取の老女がはじめたという説があります。しかも、年代が藤原時代ということで、西国と重なることになります。考えられないとは言えませんが、田村麻呂伝説と結ぶ氣仙三觀音は入つておりません。

氣仙三十三觀音は、享保二年（一七二七）高田村肝入佐々木三郎左衛門知則の御詠歌奉納になるものと記録されています。この人は、並はずれて熱心な佛教徒で、大乗妙典一字一石奉納碑を各所の札所に三基も立ておられます。

氣仙の觀音信仰へ大きなインパクトを与えた人には、猪川村「稻子沢」の初代与次右衛門があります。猪川村「稻子沢」の初代与次右衛門がありま

千年を引き継いた峻厳な郷土の精神性



佐々木三郎左衛門一字一石供養塔（馬場不動堂）



同（氷上山中腹の不動滻傍り）



同（高田町和野地辺）

す。この人は、奥州筆頭にもランクされる有徳者ですが、いかにも富豪らしい信心を示されていました。分家独立して二十年、独自の堂々たる觀音堂を建立して、高さ二メートルに及ぶ本尊聖觀音像を京都の名だたる仏師に創らせ、同時に、西国三十三觀音總てのご本尊を眺めて、あまねく拝觀を許しました。そしてさらに四十年後の宝曆元年には、三代利兵衛により阪東・秩父六十七体を加えて百一觀音を完成させ、以後、百數十年にわたりて氣仙の觀音信仰を満たしたのです。

近年、一般的に神仏へ帰依する人の心は薄れてきているかも知れません。觀音の力を念じれば、ふりかかる刀刃も碎け飛ぶなどと思われる方はおられないと存じますが、それでも、この宇宙に存在する精神性を否定される方は少ないので、と

いう思いからこの写真集をつくりました。

堂宇も仏像も、また、奉納された御詠歌等々も、いずれは人の手になるもので、技や財力が伴いますから、出来映えはさまざまなるランクの対照にされると、どうけれども、それに注がれた精神性は変わらないと信じます。西国や阪東・秩父に比して、鑑賞眼を満足させるものは多くはないかも知れませんが、ここには、ここ特有の自然と歴史があり、加えて、氣仙大工の特技にも見応えあるものが少なくありません。そしてまた、何よりも、郷里の方々のひたむきな無数の願いが染み通つているといった発想から靈場を巡りました。

本稿は、足に賭ける郷土研究家で知られる山田原三氏のご案内とご指導をいただいてまとめたものです。



宝永時代から
つづく藤(上)
と白水の井戸



荒川の地にあつた指道碑



産形山泉増寺全景
上が観音堂、下の赤屋根
が子安觀音堂でその中間に
白水の井戸があります。

あわせて九体を彫られ祭祠(さいし)されたといい、この地は「三次森大権現」と称され、天台様式の大伽藍を誇る聖域であったと言われます。その後、弥陀像は月山社へ移り、薬師像は諏訪社へ移つてそれぞれの本地仏とされたので、この地には聖觀世音菩薩像のみ残され、秘仏となりました。三十三年毎のご開帳で、過ぎる平成四年八月、十七年目の中開帳が行われました。

ここ三次森は、この地方の地殻変動によるものか、珍現象が見られました。山麓遺跡として残っている井戸は、月に一度乳白色の水が湧き出で、「今、白水」と書き出されていた「白水」の二字がやがて融合し、「今泉」の地名と伝説を残しました。

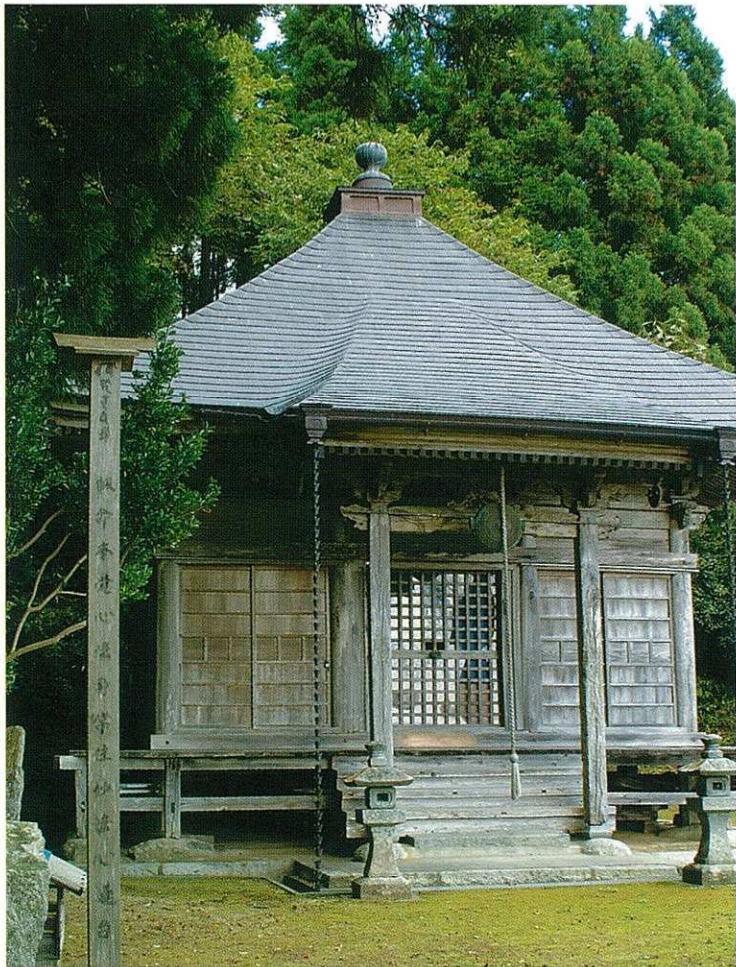
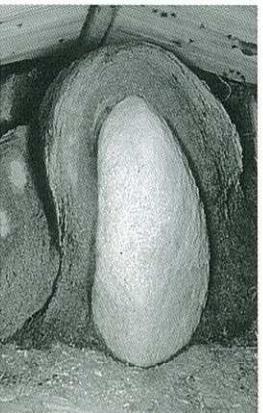
また、現在、御堂によつて保護されている、地殻の隆起作用によ



ありがたや こゝぞふだらく泉増寺
松のあらしも みのりなりけり

せんぞうじ

観音堂正面

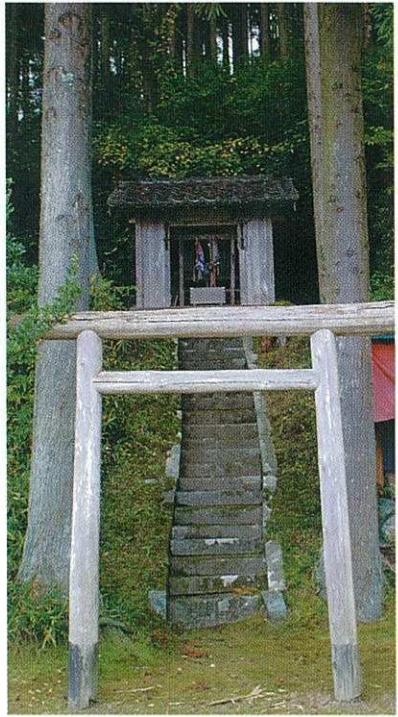
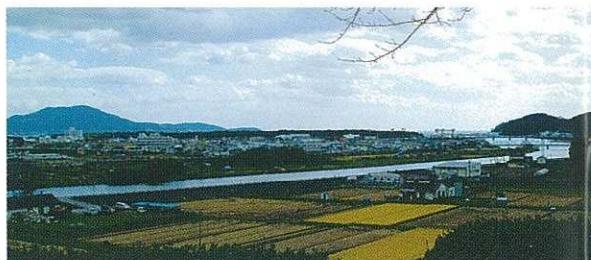


り一体化した巨岩は、出産の一瞬を連想させる形態から、「子安觀音」として祀られています。

時に仙台藩主 伊達綱村夫人が出産に際し、夫妻とともにここの聖観音像を夢にされ安産した故をもつて、家臣 白根沢軍治を普請奉行として、宝永二年（一七〇五）三間四面の総朱塗り堂宇を再建、寺号を「産形山泉増寺」と改めさせたと伝えられています。

星霜三〇〇年、現在、堂宇は老朽化が進んでいるとはいえ、全体的に整えられて、「宝永のふじ」も

伊達綱村夫人ご安産由緒の碑（右端）



宗像神社

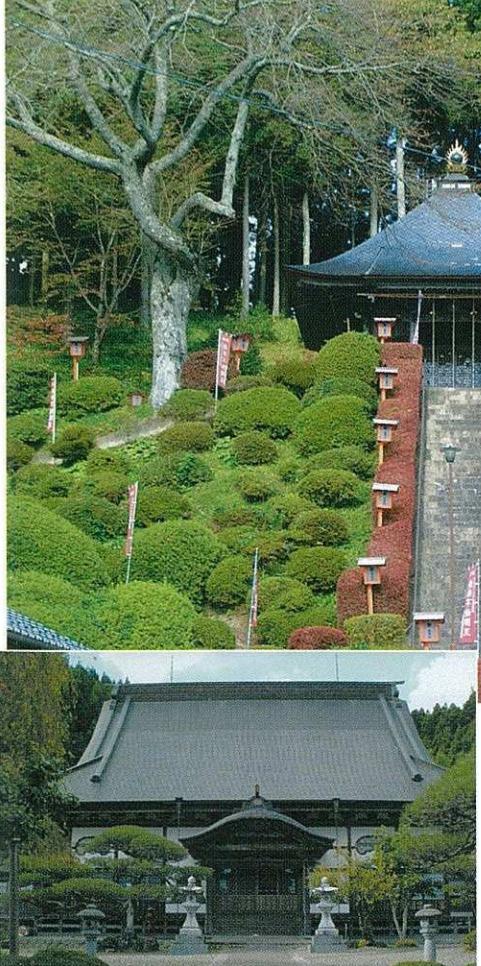
健在であり、また、ご住職が住まいを山麓に移された結果として、展望は一層広がりました。

殊にも、この特徴ともいえるものに、四季の変化が際だって美しいことがあげられると思います。時の移ろいはさまざまな想念を呼び覚ましますので、まさしくここは第一番札所「補陀落」と呼ぶにふさわしいのでしょうか。

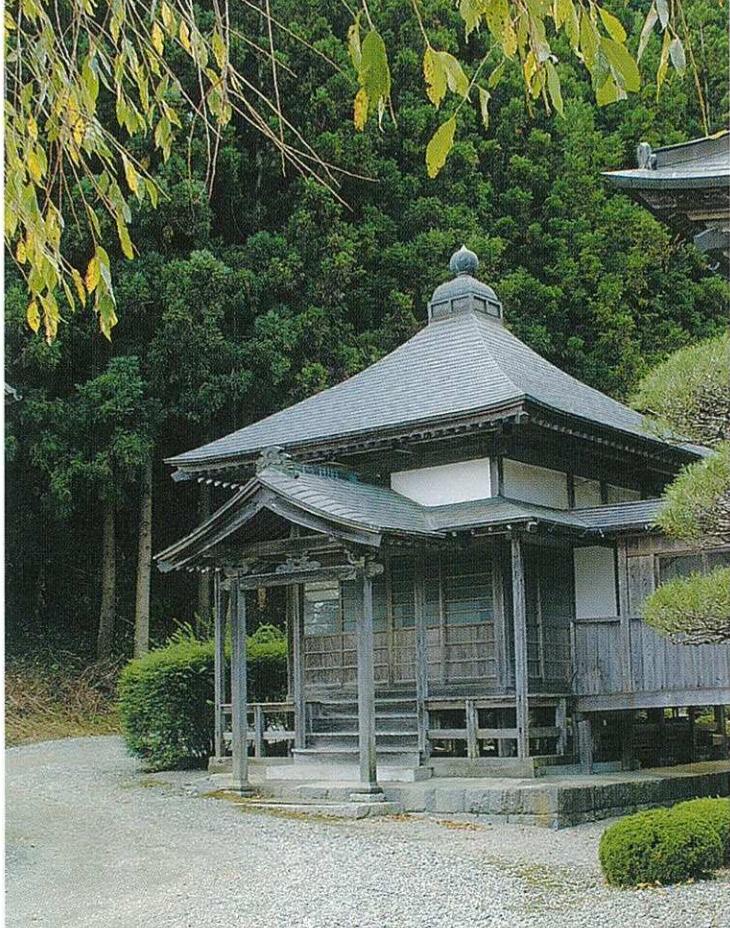
整えられた不動尊靈場



本堂正面



何事も心のごとくかなふなら
寺に参りて願へのちのよ



本堂と回廊で結ばれている観音堂

氏没落とともに堂宇も頽廃し、十八世宥真和尚が、正保二年（一六四五）に現在地へ寺を建立、後世に備えて境内に数万本の植林をし「中興の祖」となりました。

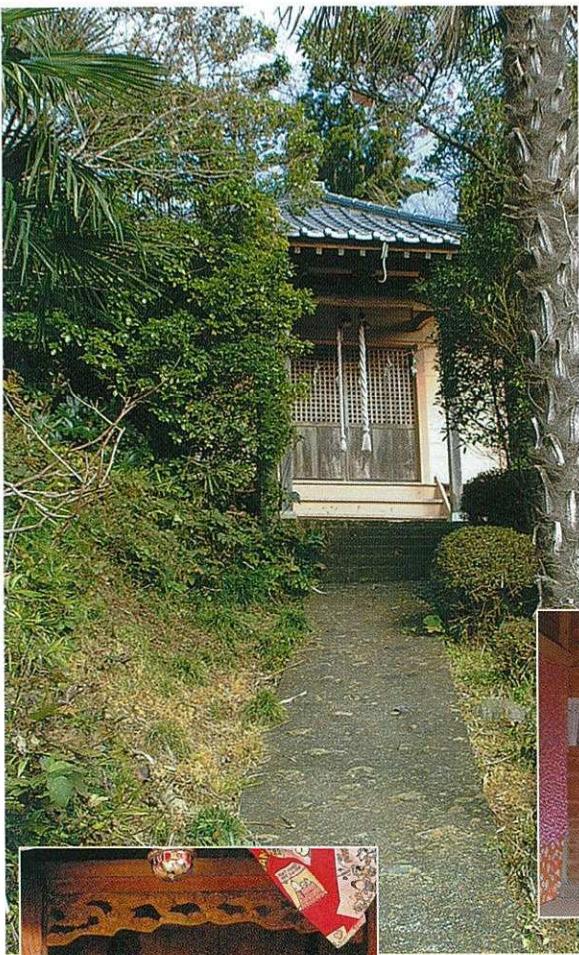
氣仙郡が伊達の所領となつてからは、今泉に代官所が置かれるなど、政治・経済の中心となり、幕府巡見使等の止宿する格式の高い寺院として、歴代多くの学僧を養成しつつ続いて来ています。

境内の一段と高い所にある護摩堂は、東北三十六不動尊靈場第二十四番札所になつており、また、出稼ぎ大工等の祈祷やお守り札等々でもにぎわいました。

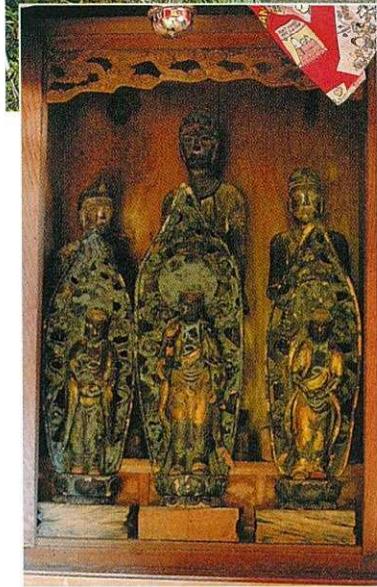
金剛寺境内には、「西国三十三觀音御砂踏靈場」という通りが設けられ、順々と拝願すれば、三十三觀音の御利益にあやかれると言います。

第二番 古谷觀音堂

(一) やかこのはじめ



観音堂と御本尊仏



ほど張り出しておられます。
兜仮というのは、武者が兜にし
のばせる一寸八分の铸造仮形のこ
とです。

少女人の
恵みも深き言谷の堂
仏のつかひ
たのもしきかな



の一番上の姉にあたるなどとも伝

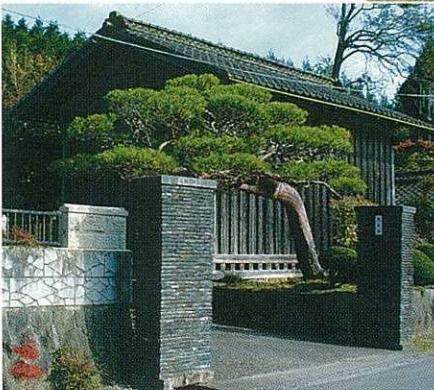
えられ、昔は「長部古谷」とも呼ばれていました。こここの観音像は、かつては純金製の「兜仏」かぶとぶつだったといいます、が、盗難に遭い、現在の木像三体仏となりました。

毎年御詠歌を短冊にしたため来る
られる巡拝者もおられて、十数枚
ほど張り出しておられます。

兜仮といふのは、武者が兜にしのばせる一寸八分の鑄造仮形のことです。

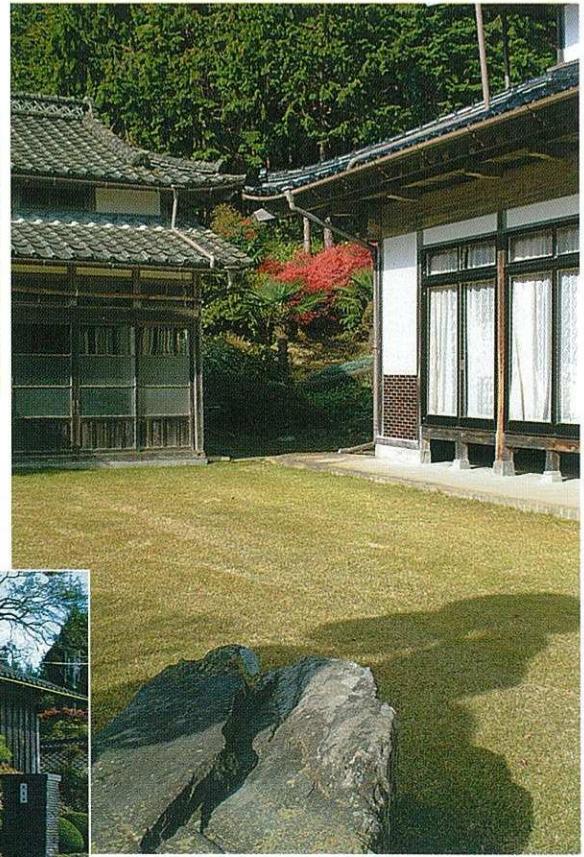


古い植木の数々と岡池



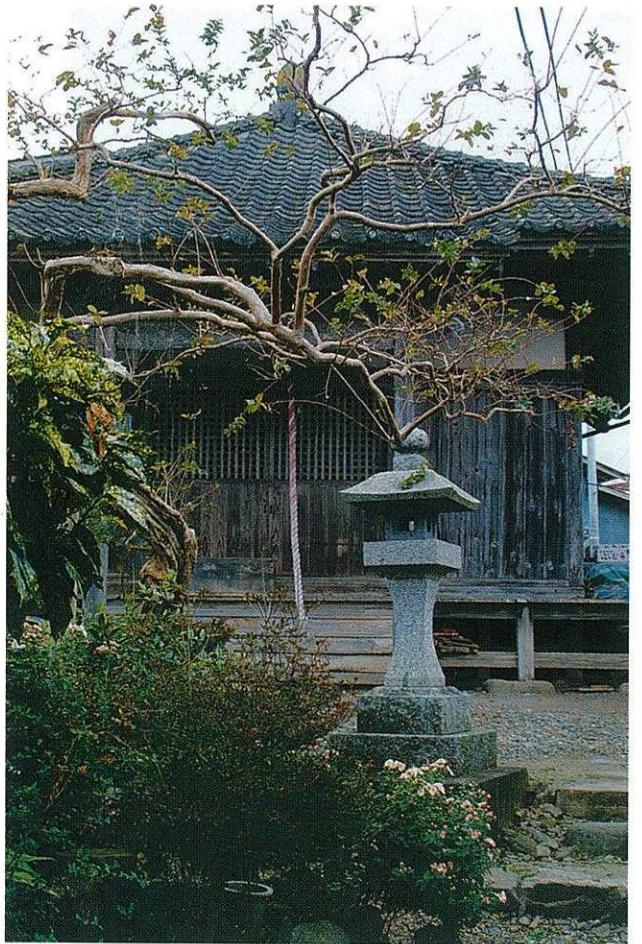
大古谷門柱

吉谷觀音堂は、屋号を「大吉谷」と呼ばれる旧家の屋敷内にあります。従つて、スレートづくりの門柱から入り、ご案内を乞うことになります。



大古谷の園庭





磯ちどり沖のかもめも
もうともに
おなじうて
なにねがうのらのよ

現在の御堂は、昭和十五年（一九四〇）の再建と申します。火災で
も見舞われたものか、前庭近くの
サルスベリの古木にそれらしい痕
跡が痛々しく残っています。

再起を果たしたサルスベリの古木

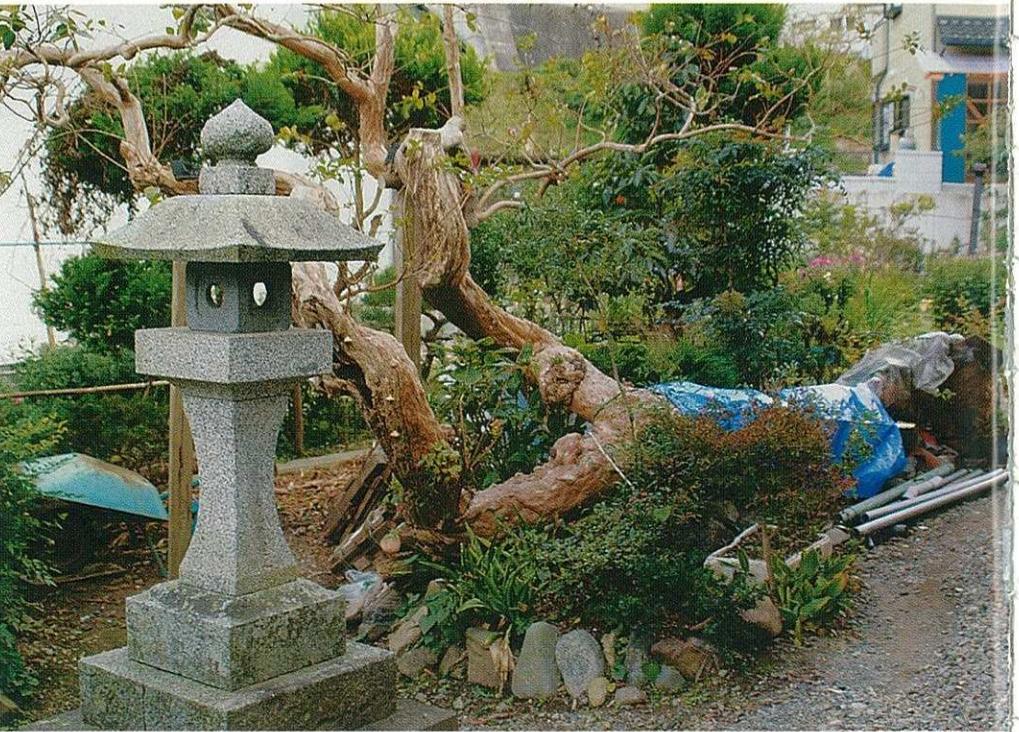
觀音堂全景

ここでの一番強烈な印象はこの
サルスベリでした。一端横転させ
られた古木が、太い幹を立ち上げ、
僅かな支えを借りて自力の再起を
果たしているのです。寄り添う宝
珠をいただいた石灯籠が輝いて見
えました。

御縁日は正

月十七日で、

ご近所の方々
が集まり「家
内安全」等の
祈願を行つて
おられるとの
ことです。



（よつがいかんのんじつ）



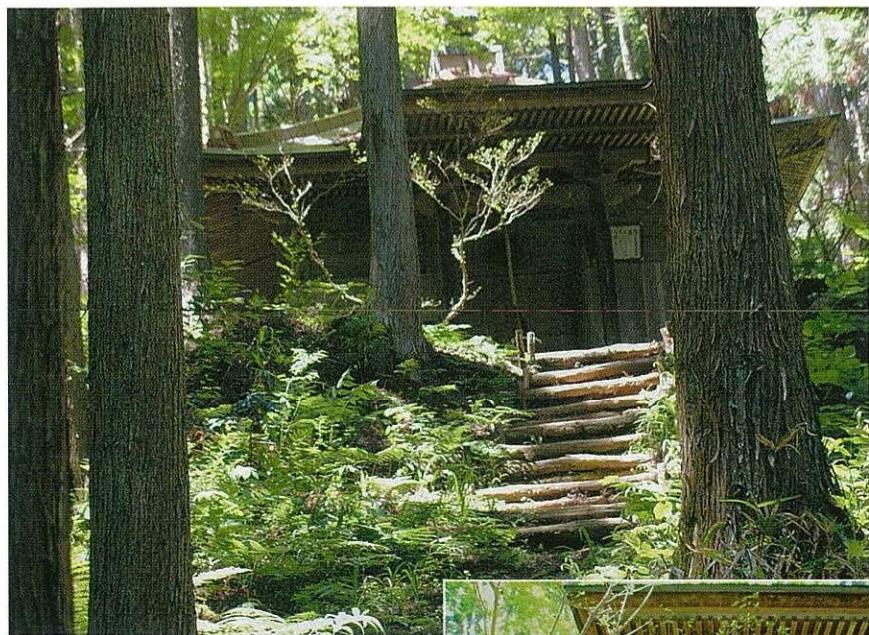
本尊は、や
はり一寸八分
の「兜仏」で
秘仏となつて
いると言いま
す。

かずかずの
よわたるしなば
おおけれど



別当を勤めておられる菅野家の先祖が觀音を背負つてこの地に土着し、後に持仏堂を建立したのが始まりと伝えられていますが、もともとの本尊は「懐仏」であり、また、長部三觀音には共通する伝えもあって、三人の武者落人だつたと考えられています。何れも、八〇〇年の往古と語られます。ここ上長部はその末の妹だという伝

山中ただすまいの上長部觀音堂

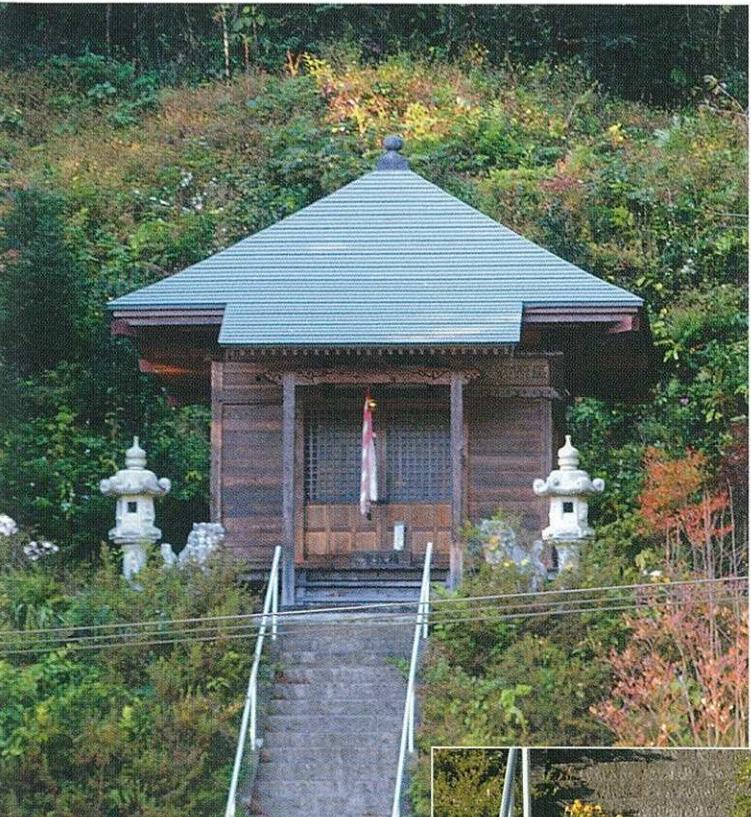


えです。
鬱蒼とした暗い杉林の険しい参道を登ると、銅板葺きの御堂が見えてきます。造りとしては二層たる木の立派なもので、薄暗い林の中には、むしろ不思議に思える程です。

ここでの觀音講は、公民館の恒例行事にもなつていてと聞きました。参道の入り口には、立派な案内石柱が建てられています。



まよひける
こころの閣をてらし、す
花のうてなにわれをむかひよ



新築された観音堂（遠撮）



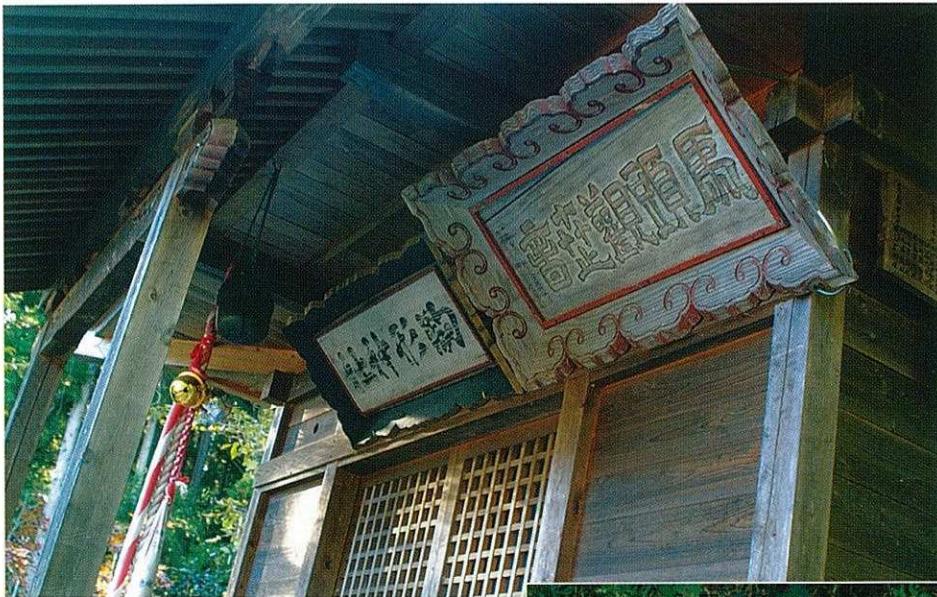
この観音堂は最近（平成七年）氏子及び地区民の浄財で新築されました。以前のお堂は文化年間（一七八〇）に建てられたと伝わるもので、二〇〇年ぶりとなります。

規模は一間四方でこれまでと同様、管理も別当を務めておられた片地家の小林寛市氏が行つております。この「片地家」は屋号ではなく地名で、往事の屋号は「忝かたじけ」

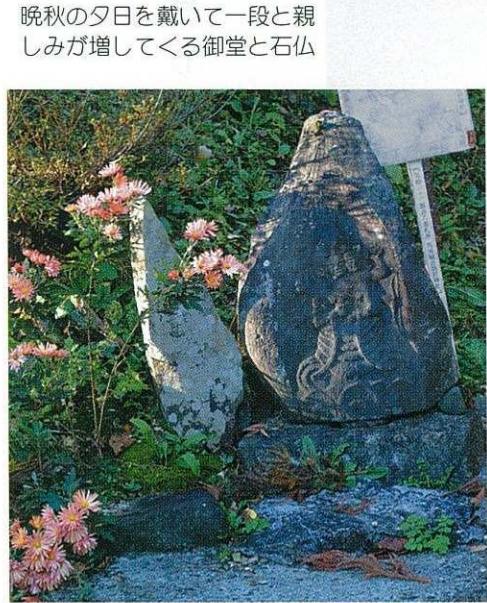
屋敷」と安永風土記に記されています。

掲額にある「駒形神社」は明治以降と考えられており、また、境内にある「馬頭観世音像塔」は、市内唯一という、貴重な碑のひとつと言われるものです。

この観音堂境内は、まさしく「花のうてな」にふさわしい雰囲気にて、この地ならではの安らぎをもたらしてくれていると感じます。観音巡拝のもう一つの側面、自然物の中から慈悲の心をいたたく、ほどよい場所と知りました。



馬頭観世音像塔

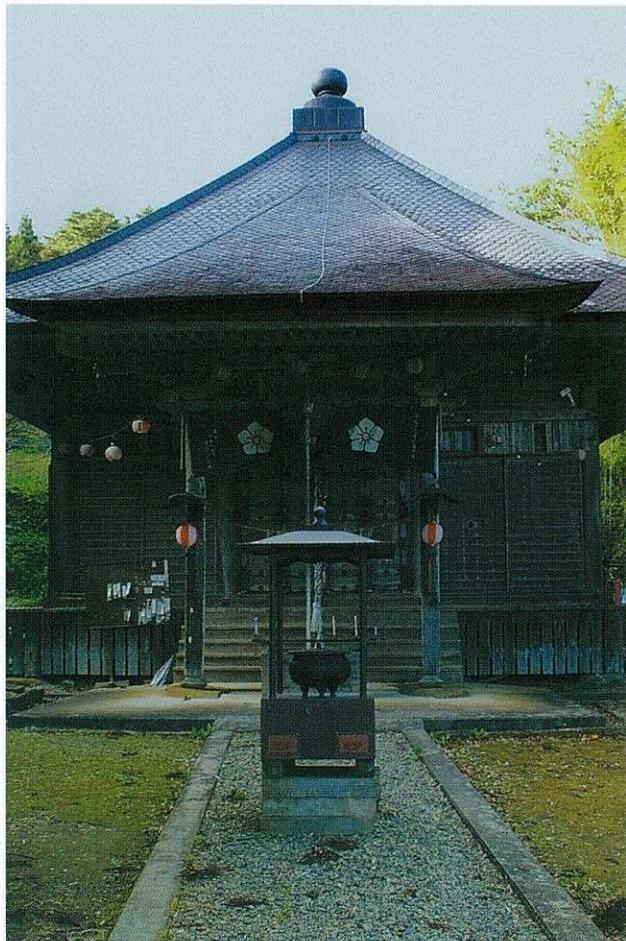


晩秋の夕日を戴いて一段と親しみが増してくる御堂と石仏

昔より じげんあらたな觀音堂

のらのよまでも
おがまぬばなし

觀音堂正面



觀音寺觀音堂は、小友町の常膳寺や大船渡市猪川町の長谷寺觀音堂と並んで「氣仙三觀音」と呼ばれ、「田村麻呂伝説」あるいは「鬼伝説」などと評されながらも、気仙史の骨格にせまる遺跡と考えられています。大同二年（八〇七）を伝える縁起では、共に田村麻呂鬼成敗に関わる物語が語られ、また、共に同規模の十一面觀音立像等が祀られ、中には、県の文化財指定

をうけているものもあります。



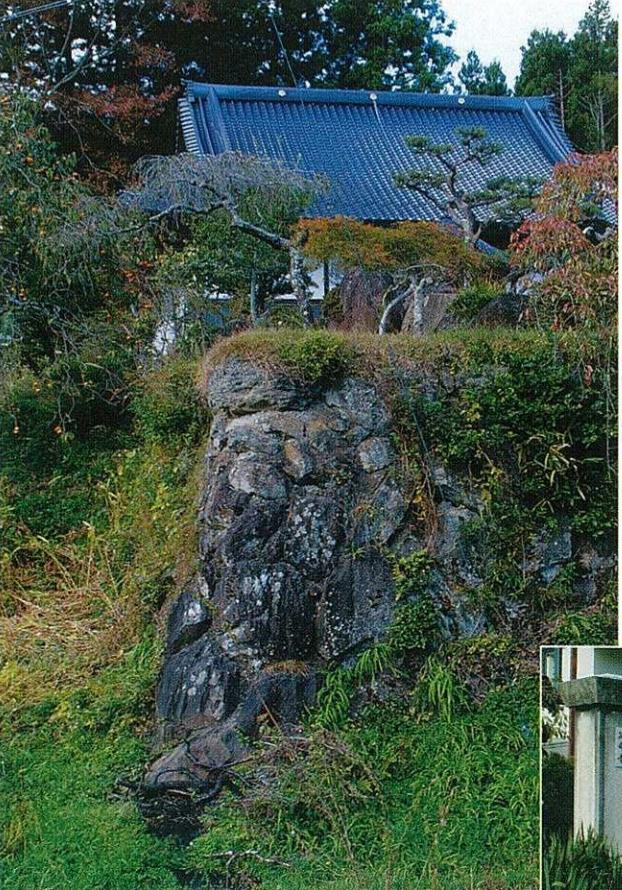
数ある寄せ碑。
古碑のなかに、珍しいものも見られましたが、残念ながら解説はできかねます。



蝦夷征伐に赴いた坂上田村麻呂は、副將軍の別府隼人を氣仙に使わし、猪川の竜福、小友の早虎、矢作の熊井を擊たせますが、そのとき、別府隼人は、小友の箱峰にて大鷹を射取り、その羽で矢を作つて熊井を討ちとりました。これが地名「矢作」の由来ともなり、また、隼人はその後病没、田村麻呂はその冥福を祈るべく十一面觀音を彫らせ、隼人を埋葬した「東」の地に御堂を建立し、知善上人を招いて入仏供養させました。

觀音寺は、もともと真言宗智山派 金剛寺の十七世が「東」から觀音堂を移して開山させたもので、寺名も「觀音寺」に改めたと言われます。なぜか山号は「長谷山」で、ご本尊は大日如來像。十一面觀音はもちろん秘仏になっています。（2P参照）

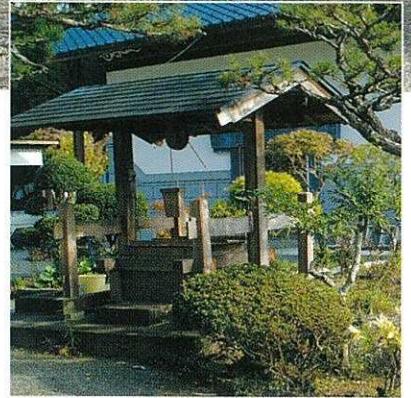
たきつせの
清き流れにほふのは
あかをすすぎて
ねがふのちのせ



延命寺中景と石門風景



山門と参道



古井戸風情。
今でも洗い物
などに利用さ
れていると言
います。

や、さらに布教を広げるべく、
氣仙川を渡つて竹駒村に滞在
しました。

守桂和尚の真摯な布教活動
に感服した竹駒村の荷替屋敷
阿部守左衛門という方が、永
禄二年（一五五九）私財を投じ、
また、広く淨財を募つて一字
を建立したものと伝えられてい
ます。

こうして竹駒山延命寺は東安寺
の末寺として、地蔵菩薩を本尊と
しています。

当寺にはほかに觀音堂と不動堂
があります。これらの御堂は延命
寺を別当として、水上山の中腹に
置かれていました。現在も「觀音
平」とか「不動滝」と言つた地名
が残っています。

享保年間（一七一六～三六）氷上山
山麓に山津波が起こり、觀音堂が

延命寺の開祖は、東山薄衣字矢
作（現在の東磐井郡川崎村薄衣字矢作）
の東安寺五世、丹嶺守桂和尚ということです。この人は、永禄の頃（一
五五九）仙台藩の家臣、伊達安芸守より氣仙の布教を命ぜられて、
同じ地名の矢作村にやつて来られたのです。

守桂和尚は、矢作村での布教中
病気になりましたが、回復され
ています。



流されるという災難がありました。幸い、千手觀世音菩薩像は間もなく探し当てられ、延命寺に仮安置されておりましたところ、その後、今度は火災に見舞われました。このときも寺は焼失しましたが、観音像は免れたのです。

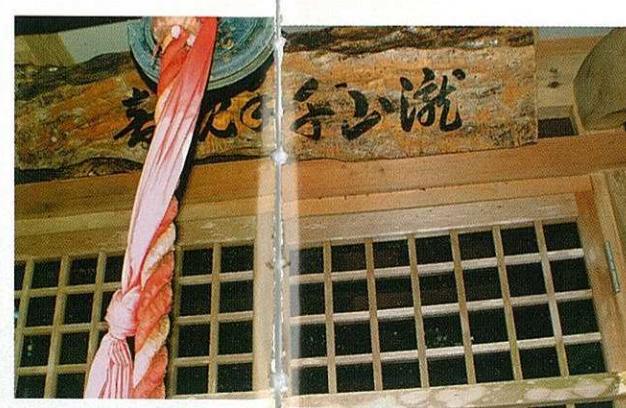
こうした経緯が考慮に入れたものか、近年になって、(昭和五三年頃)延命寺から八キロほど奥に進んだ水上山中腹に御堂を建てて、一時、千手觀音像を遷座させましたが、神仏風土の変化から来る盜難が危ぶまれ、再度、本堂に移し祀ることになったとのことです。

現在、山中お堂の周辺は「觀音平」なる地名として残り、また、「瀧山三千三觀音」も設けられています。

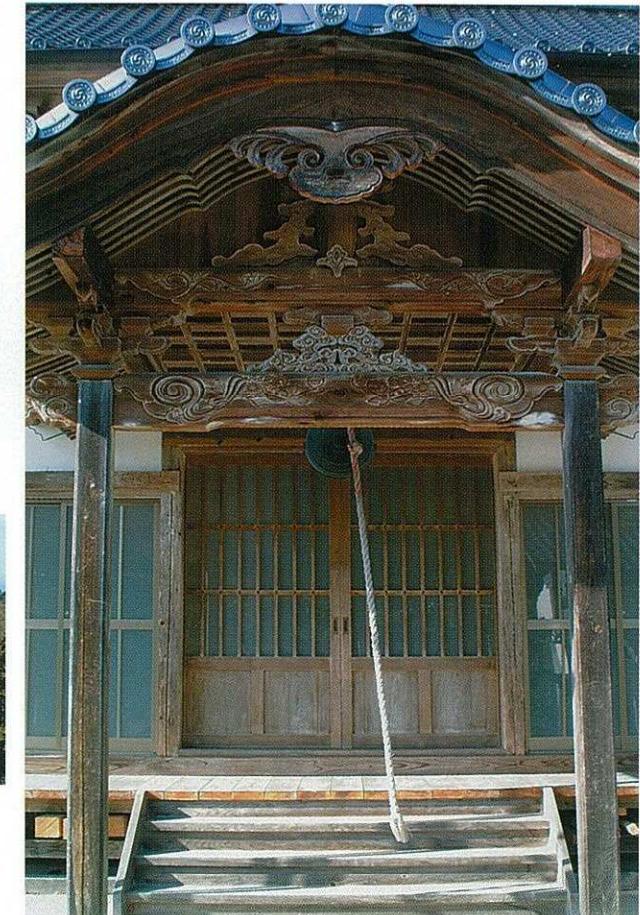
瀧山不動尊は、古来から「火の仏」として崇められ、火災など変

事の際は事前に変身して事を知らせる奇跡が起こると言わられてきました。仏像は二体、一体は当寺から三時間ほどを要する奥地に安座しもう一体は参拝者の便を考え、山の入り口に置かれています。

ここのお堂から二百メートルほど上にある「不動滝」は、年中凍ることのない清水で、元朝詣では初若水として汲みとする習わしが古くからありました。持ち帰った靈水で炊いた料理を食べると、その年一年、健康で暮らせるという信心によるもので、今でも実行されおられる家があると聞きました。



瀧山千手觀音堂



本堂向拝

竹駒のことの松山

大悲おほごの
きてみれば
花やさくらん



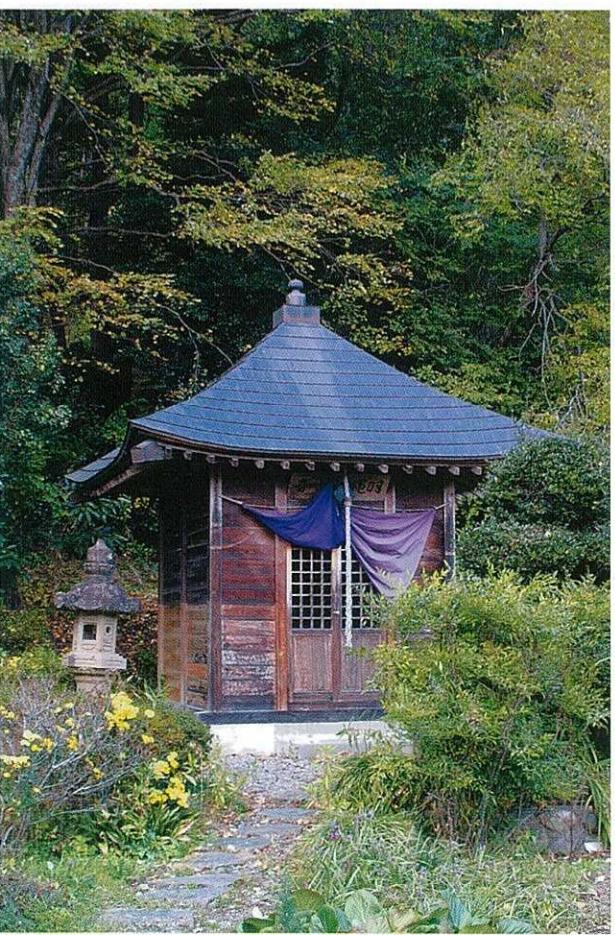
伝説として、この家の先祖が大驚にさらわれ、南方の孤島に置き去りにされたとき、「鮭の大助なり」と名乗る白髪の老人が現れ、共に鮭の姿となつて竹駒の里に帰ることができたといいます。松野家



裏手の里道。坊寺(地名)に続く



松野家の一字一石供養碑



現在の觀音堂

では、そのお礼として、毎年十月二十日は気仙川の鮭漁を止め、上流に鮭を遡上させたと伝えられています。

近年まで觀音堂は松野家の邸内に置かれていました。祀られていた觀音仏は三体でしたが、一体が盜難に遭い所在不明です。現在は、同家の東寄りに一間四面のお堂を建て祀られています。

気仙川河口の鮭漁は古くから重要な生業となっています。いろいろな形で係争が絶えませんでしたが、上流地である竹駒での羽繩漁に対する軋轢も厳しいものだつた様なので、伝説も觀音信仰も大いに必然性があつたのでしょう。

鮭漁の道具が、屋号となつたり觀音堂の名前になつたりしながら今に伝わること自体、何か深く重いメッセージを感じられました。





本堂と聖觀音菩薩像

か
わ
ねんぐわんも
かなひ
たまへや
正覺寺

正覺寺は山号を「雪沢山」とい
い、天台宗淨土寺の支院として、
天正五年（一五七七）の創建でした。

本寺である淨土寺は、「厭離山」と号し、当初、矢作村雪沢の地に
ありました。厭離とは、俗世をは
かなんで去るという意ですから、
なにか特殊な経緯がひらめきます
が、雪沢金山全盛のころは、支院
を設けて栄えました。

しかし、淨土寺は正徳四年（一七



囲いでまとめられた石仏（上）と御詠歌碑（左）

（一四）金山の衰退によつて正覺寺と
もども矢作の地を離れて竹駒に移
り、更に、享保二十年（一七三五）に
至つて、正覺寺を竹駒に残し、高
田村に本拠を移しました。

正覺寺の山号は、これらの
経緯を記す意味でも残され
たのでしよう。

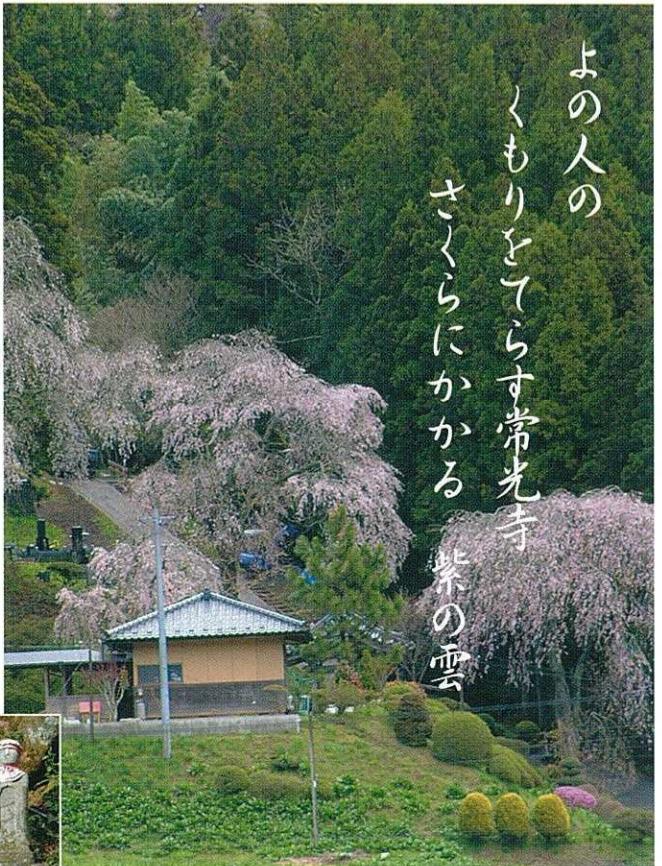
現在の正覺寺本堂は嘉永
五年（一八二五）に再建された
ものを、昭和五十一年（一九
五六）に大改修しました。聖
觀音菩薩像は、本堂内陣に
安置され、五十五センチの
立像仏は金箔は落ちました
が、往時の隆盛をしつかり
漂わせています。

なお、ご住職は、昭和の
中頃なくなられて以来、本
家寺淨土寺の住職により兼
務されております。

よの人の

くもりをてらす常光寺
さくらにかかる

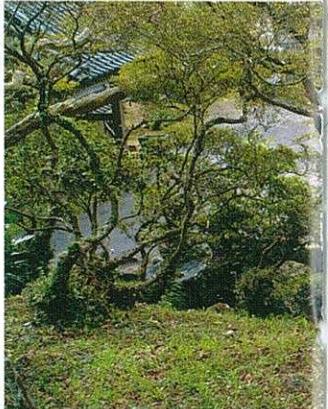
紫の雲



桜花爛漫の常光寺境内桜



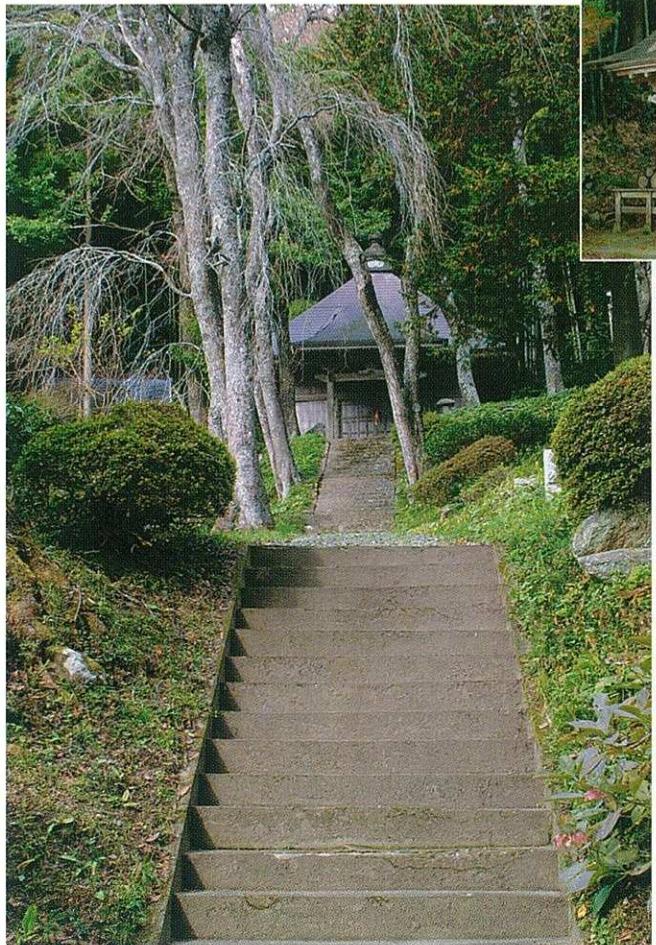
故事を語らう植木



A large, weathered stone tub filled with water, connected to a metal pipe system.



馬頭觀音堂



内の前方には、気仙郡司 金為雄の居館跡があり、また、一帯に多くの産金跡があることから、当寺の創建に金氏が関わっていたと目されています。

境内は五千平方メートル、しだれ桜と竹林に囲まれた、奥ゆかしく華麗な構えで、目にとまるものが数多くあります。千手觀音堂は石段の上方にすぐ認められ、左手よりには一回り小さな馬頭觀音堂があります。

大正三年、横田村が大火に見舞われた際、当寺も本尊三体仏ほか諸資料等灰燼に帰し、観音堂もまた、元禄期（一六八八—一七〇四）から伝わる運慶作の本尊、千手座像ともども消失しました。

現在の觀音堂は、大正七年の再建になるもので、本堂は、火難に備えてか、近年、鉄骨造りの防火壁となりました。

千手山常光寺は、平泉藤原氏の領内一村一ヵ寺建設計画により創設されたものと言われます。開祖は中尊寺の客僧で、紀州和歌山生まれの常光法印とされ、一説で、建仁元年（一二〇一）の創建と伝えられ、真言宗智山派、金剛寺の末寺となっています。

当時は平泉文化を支えた氣仙産金の全盛時代であり、この地も砂金の宝庫とされた地域でした。境